

◆渡部政盛氏新著◆菊判最上製美本箱入 紙數七百餘頁全壹冊 金五圓八拾錢 送料金廿四錢

版五 集說 批判 教育學概論

本書 六大 特色

本書内容は(一)歴史批判(二)事實批判(三)現代思潮批判(四)目的々本質的批判に立脚して最眞最善の教育原理を闡明し實際教育に對して最も根本的なる最も最新なる規範を提供したのである。教育一般を研究の對象として科學に立脚しながら哲學を忘れず、教育の意義・教育學の概念を諸方面から縱横に考察論明し特に理論的教育學の新體系を確立し教育原理の基礎論として詳細なる被教育者論及社會人生論を試み目的概念としての文化的人格の形式内容を精説し教授訓練の二方便説に隨つて方論を二分的に説述し最後に独自の見地から教育動力論(教育者論)を試み機關論をなした。系統的てふ形容の意味は本書に於てのみ味ふことが出来やうかと思ふ。本書は眞に果敢的にして批 的である。教育學研究者文檢受験者學校圖書館の必備及清鑑を俟つ所以なり。〔執筆六個年で完成せる苦心の大著〕

- ▲教育概念の批判的本質的闡明
- ▲教育基礎論なる新研究項目の特設
- ▲教育學概念の科學的哲學的論明
- ▲教授訓練二方便説の徹底的主張
- ▲新教育學體系の模範的確立
- ▲最近教育思潮の批判的攝取

東京市神田區表神保町七
大同館發行

東京帝國大學文學部教授 文學博士 宇野哲人先生新著 (文檢受験者必讀書)
東京高等師範學校教授

版五廿

支那哲學史講話

本書は上古より清末に至る迄の支那思想の大要を極めて平易簡單に叙述して最もよく要領を盡くせるものなり。特に清朝に於ける學術思想の變遷が如何に暗々裏に革命を惹起するに至りしか、支那の新人の思想は如何なる傾向を帯ぶるか、は著者の最も留意せる所にして從來世に行はれたる支那哲學史の缺陷は本書に依て補足せられて亦遺憾なし。本書は又附録として一々原文を掲げて直ちに堂奥を窺ふの便に供し亦著者の議論の根據あるを知らしむ。要するに本書は初學者にも専攻家にも座右に缺くべからざる絶好の新著なり。

菊判最上製美本
全壹冊五百頁
正 價 貳圓八拾錢
送料十八錢

版七

支那哲學史講話の姉妹篇 支那哲學の研究

支那哲學史講話の姉妹篇 本書は上は三代より下は近世に至り或は一代の思想を概論し或は特殊の問 講話を讀んで略々大意に通ずる者は更に此書に就て斯學の堂奥に參せよ。 (内容の一斑) 支那哲學概観：先秦思想概観：孔子の三大事業：教育家としての孔子：曾子の學說：孟子の教育説：孟子の自由平等觀：漢代思想の傾向：竹林の七賢に就て：文中子の哲學：支那文化の考察と其特質：孟子の君臣論：洪範を論ず。其他

四六判最上製本
全壹冊五百頁
金貳圓八拾錢
送料十二錢

發兌 東京市神田區表神保町七 大同館書店

東京帝國大學文科助教授 文學博士 宇野哲人先生新著

拾版

四書講義 大 學

菊判最上製美本
全壹冊參百五拾頁
金貳圓參拾錢
郵税金十八錢

大學は儒教の目的を最も善く組織的に叙述せるものなりとは著者の創唱する所、此書は如上の見解によりて平易明晰に講述せるものにして冠するに大學要旨を以てし附するに索川及之と密接の關係ある幾多有益の研究を以てす。苟くも儒教の何物たるかを知らんと欲せば必ず此書を繕いて著者の圓熟せる講話を聞かざるべからず。

東京帝國大學文科助教授 文學博士 宇野哲人先生新著

拾版

四書講義 中 庸

菊判最上製美本
全壹冊壹百八拾頁
正價貳圓八拾錢
郵税十八錢

儒教の目的は大學に備はり、中庸の根本義は中庸に明かである。かくて中庸の二書は經となり緯となり。互に相待つて儒教の眞相を傳ふ。著者は如上の見解を以て先に大學講義を著しし今亦中庸講義を著す。大學に由て既に儒教の目的を明かにせる大方の士は請ふ更に中庸に就いて儒教の眞面目を了せよ。尙附註教篇は皆直接間接に中庸の意義を明かにするものである。

文驗受驗者
必備の要書

東京 神田
大 同 館 藏 版

大 同 館 發 行 圖 書 目 録

野村隈畔先生新著

(現代文化の哲學の姉妹編)

自我批判の哲學

四六判最上製美本
全壹冊約六百頁
正價金 貳圓
郵税金拾貳錢

如何なる思索も如何なる哲學も自我の本性に徹底することより深遠なるものはない。現時哲學界に於いて絶對自由の意志を説き、絶對價值を高調し或は生命の流動を主張するものありと雖も自我の具體的本性に徹底するものなきは現代の生活要求を裏切る根本的缺陷である。著者はカントの理性批判に據らず、ベルグソンの直觀批判に満足せず自ら進んで獨特な自我批判の哲學を建設した。是れ現代の生活要求を根本的に確實ならしめ且つ凡らゆる思想主義を批判的に基礎づけるもの蓋し我國最新の哲學であらう。而して餘りに専門的でなく又常識的でなきは何人も必讀すべき哲學である。

現代生活のどん底
より生れたる新哲學

目次

一序言：二自由文化の建設：三自我の意
義：四自我と純粹己意欲：五文化の方向の具體的考察：六自由文化の建設：七自我の意
義：八當爲性の發展：九自由性の發展：一〇形而上性の發展：一一五結論：一二自由文化の内
自由と愛：一三自我哲學と文化哲學：一四附録三篇

2-4242

長と

大 同 館 發 行 圖 書 目 錄

文學博士 紀平正美先生新著

拾 版 自 我 論

四六判最上製美本
全壹册紙數約五百頁
金貳圓參拾錢
郵稅金十二錢

本書「自我論」一篇は全く自分の觀念論の上に立脚して組織したものである。前編「自我の分析」に於ては出來得る限りの分析を試みた。廣義に於ける教育者或は人の上に立つ人には其方法上に多少の參考書となるべきものと信ずる。後編「人格の價值」に於ては人格の意義と價值とを論理的に定めんと企てた。即ち理想の何ものたるかを論じて哲學○宗教○道徳其他一般に人文現象の根柢となるべきものを定め以て現代人の趨くべき方法を示さんと計つた積りである切に學者の批評を待つ。——著者識——

文學博士 紀平正美先生新著

七 版 改 訂 人 格 の 力

四六判最上製美本
全壹册三百廿頁
正價 圓八拾錢
郵稅金十二錢

本書は今より十一年前に一度江湖に愛讀を得たものであるが其後久しく絶いせられてゐた。然るに昨年末に其姉妹篇たる「自我論」を出版したに就て再び讀者から要求が出たので同書の出版社からして再び世に出る事になつたのである。然し十一年の間に社會の事情も非常に變化した。自分の思想も亦多少の展してゐるのであるから其の儘での再勸は到底許す事が出來ない。それで全部書き改めて自分の責任を新にしたのである。もと四拾錢の價のものに壹圓五拾錢になつた。内容に其れ丈の差があるか否かは讀者の判定に待つべきであるが自分からは時代の推移と諦められん事を願ふのである。——著者識——

525
189

終